

「島根・九州だより」(小泉八雲) 解題

榊 井 幹 生

(女子短期大学部助教授)

はじめに

「島根・九州だより」の存在は、これまで丸山学氏、池野誠氏らの仕事でうすうす知っていたが、もっとはっきりと知ったのは、英語青年(昭和59年7月)に載った寿岳文章博士の連載「私の戦後史抄」の9回目「向日庵本の思い出」による。100部限定の稀観書の一冊が京都外国語大学アジャ図書館にあることをつきとめ、6月下旬にはそのNo.86のコピーを入手した。それから約1年間このチャーミングな小品との付合が始まった。

ハーン研究の資料としても重要なものだが、読み物としても肩のこらない平易さで、筆者は精読の目的で翻訳を試みた。実際とりかかってみると、人名や地名等の考証が意外と難物であることが分かり、そのため松江に数回、九州福岡、熊本にも一回足を運んだが、島根県立図書館、熊本県立図書館、玉湯町役場、玉作湯神社、福岡市役所、元熊本市文化課長鈴木喬氏、ハーン研究家梶谷泰之京都外国語大学名誉教授など数多くの機関、人々との文通や面談で多くの資料を得て、こと考証に関するかぎりは自分なりに自信の持てる訳が固まって行った。

第一訳稿ができ上がったところで早稲田大学池田雅之教授に見ていただいたところ、恒文社の「ラフカディオ・ハーン著作集」の一巻に加えていただく事になり、その後訳文、考証等に最後の磨きをかけ、この5月の末、訳を完成し東京に送ることができたのである。後になって申し訳けないが、本テキストを作られた寿岳文章博士に邦訳のお許しを願い出たところ、幸いにも快諾をいただき、筆者も安堵の胸をなでおろした次第である。

訳の終りにつけた解説及び本文中の訳注は、一般読者のことを考えて極く簡単なものにした。したがってそこでは翻訳作業中にいただいた各方面からの貴重な資料、ご教示に対し十分報いることができなかった。

小論は19に及ぶ通信の一つ一つに解題ともいふべき解説をつけ、考証的なことは細大もらさず収め、各方面のご助力を謝すとともに「島根・九州だより」の邦語訳のよりくわしい手引きともなればと願いまとめたものである。

寿岳文章博士が「私の知る限り、研究者が本書の存在を問題としないのはなぜだろうか。全集と名乗るからには本書は絶対に欠落を許されないのに、原文でも翻訳でも見すごされている。」と書

いておられるが、非才を顧みず拙訳を試みたことで、博士のご疑問の万分の一でも答えることができたとしたら望外の喜びである。

最後に島根県立図書館、熊本県立図書館などへ資料請求の労をとって下さった本学図書館の根岸さん、その他ハーン関係の資料等でお世話になった酒井さん、長谷川（芳）さんにここで厚くお礼申し上げます。

第1信 松江発 1890年11月3日

この第1信は早速山陰の地方都市にも伝わり、以下のように山陰新聞で報じられるところとなった。

明治23年11月15日（土）

ヘルン氏にはあらざるか

近着の横浜メール新聞を見るに該社の通信者よりとして、本月三日の松江発書翰を掲記せり。其の中には客月二十五日の二の丸教育大運動会の模様並びに天長節の景況杯を詳記しあり。書中の文辞何と無く日本人、殊に当地方人の筆に成れるものにあらざると察せられるる点あり。想念す、当中学校の雇教師ヘルン氏嘗て新聞に従事する十数年、今尚ほ英米諸新聞紙の寄書家なりと聞けることを。右の通信者と言へるも、或は氏の事にはあらざるか。

山陰新聞記者の推測は当たっていた。‘該社の通信者’ (From Our Own Correspondent) は以下の通信はすべて無署名でジャパン・ウィークリー・メールに送られたことを物語る。

二の丸教育大運動会は10月25日付西田千太郎日記によると松江及近傍諸学校連合大運動会となっている。「英語教師の日記」(V)でもこの運動会の模様が語られているが、その日付10月15日はハーン独特のボカシであろうか。ところが地方官吏の溝部某が参事官を拜命滋賀県に出発したという記事のあと天長節（明治天皇誕生日）の短信に移るのだが「英語教師の日記」(X)では11月3日と正しい日付のもとに詳述している。

第2信 松江発 1890年12月5日

第1信の末尾に短信の形で予告された天長節の模様の詳報から始まる。

天長節は^{どう}鑿行列と重っているため、主として鑿行列の祭事に重点がおかれている。祭りはハーンの特に興味を引くものであった。亥の子祭とか「チョーサイヤ、チョーサイヤ」という掛け声（土

地の人はチョーサヤ・チョーサと言うらしい）とか現在土地の人でも忘れかけているような古めかしいことが出てくる。松江の郷土史家速水保孝氏は松江の鬻行列のはじまりについて次のように書いている。

「五代松江藩主松平宣維のおすみの後妻は、伏見宮家から降嫁して来た岩姫で、迷信深いことで有名である。後年、財政難に悩む子供の宗衍むねのぶに強要し、推恵神社すいけいを建立させたことは紹介済み。日御碕神社けんぎようたかとし たたりの小野検校尊俊の崇をおそれたのである。この岩姫の淋しさを慰めようと、町内ごとに競って大ドウをつくり、ドウ行列を仕組んだというがまことにあやしい。また一説には、藩主の擄取に悩んだ町衆が、藩主一家を十分眠らせないように、大ドウをたたいてウサ晴らしをしたともいう。この話の方が民衆心理をうがったもので、作り話にしてもおもしろい。」

（出雲祭事記 講談社）

小野検校尊俊の事は作品（「日御碕にて」(IV)）にも書かれているが、岩姫とどう行列のかかわりについての上記の伝説をハーンは知っていたであろうか。尚ドウ台の模型は松江城内の郷土資料館に展示されている。

日本青少年の素朴な皇室観について感想を述べたあと、次に教育勅語捧読式の模様を伝えている。西田日記11月15日付の記事に「我國民徳育ノ基礎ニ関スル客月末ノ勅語全国ノ諸学校ニ於テ捧読式ヲ行フ。我中学ニ於テモ本日之ヲ挙行シ、県知事自ラ捧読シ、且生徒ニ向テ誨告スル処アリ。来賓ハ高等官、県会議員等数十名。…」とあり、ハーンも「英語教師の日記」(VII)で詳述している。来賓については11月16日付山陰新聞によると更にくわしいことが分かる。即ち知事、書記官、参事官、学務係員、藤井裁判所所長、北川検事正、三浦裁判所所長、西田警部長、宮内収税長、山田太尉、大野郡長、県会議長、県会議員諸氏である。（池野 p. 70）

第2信三つ目の話題は帝国議会開院についてである。歴史的にはこの議会開院は自由民権運動のホコ先をうまくかわした政府の老かい極まる政策だったのであろうが、ハーンは日本近代史のエポック・メーカーな事件に居合せたのである。ハーンは学生に対する祝賀式と西田日記にも見える有志による城内記念碑前での祝宴の両方を伝えている。

最後に松江市民にとってエポック・メーカーな第15代松江大橋開通式の予告をし、松江初冬の気候を略述して第2信を結んでいる。

第3信 松江発 1891年1月24日

第3信は松江の冬の厳しさの報告ではじまる。淡々とした筆致で客観的な表現に終始しているが、実際にはハーンが死ぬほどの目に合った極東での初めての冬であった。1月24日といえば一週間ほど悩んだ気管支カタルからやっと小康を得たが、今度は毎日といってもいいほど見舞ってくれた西田千太郎が倒れてしまった頃だ。宍道湖の荒々しい冬の形相、また西田日記にも言及のある強風のため仮大橋から湖水に吹き飛ばされた子供のエピソードなどが生き生きと語られる。

こんな厳しい状況の中でもハーンの好奇心はなおも盛んである。この正月の飾りつけのことは後の作品「二つの珍しい祭り」の材料となっている。

再び烈しい風雪の便りとなるが、西田日記の「インフリューエンザ再ビ東京其他ニ猖獗ヲ極メ云々」に言及のある流行性感冒のことにもふれ、後の尾濃大震災の記事もそうだが、全国的なニュースをも伝えようとするところは、いかにも元新聞記者らしい。

第4信 松江発 1891年1月25日

前信を送った翌日の記事で、和田見情死事件特集というべきものである。鳥根県立図書館で山陰新聞のマイクロ・フィルムを調べたが、筆者が探し当てたのは極く簡単に、しかも冷笑をこめて扱ったほんの数行の短信（1月4日付）だけで、もしやと思って探した例の女の書き置きは発見できなかった。しかしこの記事から和田見町、増田楼、三谷かね（原文では Kame となっているが、作品「心中」では Kane とあるから、恐らく m,n の誤植であろう）、田代竜一郎といった固有名詞の考証を得た。ハーンはモルヒネと書いているが、新聞ではステリキニーとなっている。

これはそのまま作品「心中」の素材となるのだが、前段に述べられるハーン一流の弱者に対する強い同情心に富む感想は作品に再現されていないようだ。また末尾の一節「この事件がなにか教訓を残したかどうかは分からない。だがこのような事件を生むような社会状況はわれら西欧のそれより幾倍も劣悪であろうか。もし政治によって社会情勢が変わったとき、結果は悪い方になるであろうか、あるいは良い方になるであろうか。ある種の人々にとってこんな問いは全く簡単明瞭であろう。だが社会学的な諸問題を深く追求した人なら答えを出すまでに一番長くためらうであろう。法の網をかいくぐったあの西欧の悪徳の残酷さ、恐ろしさ、激烈さというものは幸なるかなここ東洋ではまだ知られていないのである。」ではハーン一流の文明批評が披れきされる。

第5信 松江発 1891年3月4日

松江市郊外に起った地変の記事である。ハーンは2月14日のこととしているが、3月1日付西田日記によると2月4日とある。ハーンの誤記であろうか。

ハーン 2月14日 午前3時頃

西田 2月4日 午後10時頃

この日付の疑問点より困ったのはローマ字で書かれた地名考証である。Otsutsumiyama は西田日記で大堤山と分かったが、Otami-yama, Jabantani に漢字を当てるとあたっては玉湯町役場のお世話になった。その結果 Otami-yama は Otani-yama で大谷山のことではなからうかという返事をいただいた。（これは Kane, Kame のときと同様 m,n の誤植とも考えられる。）Jabantani については「大谷山の中に茶屋奥という谷の地名があり、これを地元民は通称 Chayantani と呼んでい

「島根・九州だより」（小泉八雲）解題

たことから、これが地元民の訛等で外国人の耳には *Jabantani*^{ジャバントニ} と聞え、そのように表記したのではないか。」との示唆により茶屋谷といささか原音とははなれた大胆な漢字を当てた。

この地変の爪あとを中学校や師範学校の生徒が教師引率のもとに見学する様子が描かれているが、これは出雲の教育熱の証拠として「英語教師の日記」にも再録されている。（VI）

最後は二回目の新大橋開通式の予告である。大橋にまつわる源助という人柱のことがふれられ、セルビアのスカドラ城悲話への言及がある。これは作品「神国の首都—松江」にも取り上げられていることは衆知のとうりだ。ただセルビアをシベリアと誤訳した訳者がいるので注意されたい。この古いバラッドについては恒文社の「ユーゴスラビアの民話 II」に載っているので一読を奨める。また松江城の人柱については「名城伝説」（江崎俊平 教養文庫）でくわしく知ることができる。

第6信 松江発 1891年4月7日

ハーンが前に何度も予告した新松江大橋開通式の詳報である。この記事を読むには内田兼四郎編著「松江大橋物語」が役に立つ。ハーンの記事は基礎工事に係わる難工事を土木監督局の広島出張所から派遣された奥野技師が見事に克服したことなども述べ、きわめてくわしい。

松江大橋 飾りのためか
その柱を改良せよ
改良せい
改良せい

という悪童どもの戯れ唄は当時流行っていた改良節の替え唄であろうか、時代色がでていて面白い。開通式の模様は新聞記者出身のハーンなればこそといった、誠に詳しいものである。工事に要した費用も一万一千円と書かれているが、前掲「松江大橋物語」では一万二千三百四十円とあるから、ほぼ合っており、ハーンの記事の正確さを物語っている。

第7信 松江発 1891年4月15日

1. もう一件心中事件が起る。これは先の和田見情死事件の亜流として、ハーンも軽く扱っている。
2. 荒川重之輔（亀齊）のこと。特に彼の芸風を物語る雨蛙のエピソード。荒川重之輔との交友はその後もずっと続く。
3. 籠手田安定知事の新潟転出について。ここでは籠手田知事の人物が熱っぽく語られる。最近京都新聞社から出た「近江史を歩く」では、島根県の前は滋賀県知事だったらしく、滋賀県知事と

しての業績は余り香ばしくなかったようである。

第8信 松江発 1891年5月14日

新古美術品展覧会見学記。

5月5日付西田日記に「新古美術品展覧会、本日ヨリ殿町勸業品展覧場内ニ開会に付ヘルン氏ト同行。」とある。8日、9日もヘルン氏と同行したとあるから、5月5日から5月15日まで（日曜を除く？）10日間に少なくとも3回西田はハーンと展覧会場に足を運んでいる。ハーンのような展覧会趣味は相当なものだったらしい。そもそも日本に来るきっかけを作ったのはニュー・オーリンズでの綿花工業博の日本展であり、日本に着いた年は第3回内国勸業博が上野公園一帯で行われていた。ハーンはこの上野の博覧会に訪れたらしい証拠も本通信で得られる。偶然のことながら西田も上京中に博覧会を見物していたのである。

会場や運営方法、入場者数など概括的なことを述べたあとは、展示物のオン・パレードとなるわけだが、読者はハーンの世界古美術に対する博識ぶりに驚嘆させられる。おそらく事前に出品目録が発行されており、それと西田の通弁でこの記事ができ上がったのだろうと思う。ハーンの側に立って、実物とカタログを交互に見て四苦八苦している西田教頭の当惑顔が目につくようである。

筆者としては画家の名の考証に苦労した。幸い当時の山陰新聞に「新古美術品展覧会出品目録略」が4月21日から5月9日まで12回連載されていたので、鳥根県立図書館郷土資料係のご厚意でコピーを入手し、それによって考証が進んだ。中にはどうしても分からないものがあり、それらを出品した安来清水寺の貫主様から直接ご教示を頂いたものもある。

ハーンが出雲は素晴らしい古美術品の宝庫と舌を捲いたのも無理はない。古美術など全くの素人の筆者でさえ目録からうかがわれる尤物の豪華さに啞然としたほどだからだ。狩野派、雲谷派、土佐派などの名品は勿論、^{ろき}呂^{もつけい}紀、牧谿などの請来物も展示されているのだから。

ハーンが言及した作品については別紙に一覧表を作っておいたから、ここでは詳しく述べない。ただハーンの世界美術眼、特に日本古美術に対する眼力の鋭さ、豊かさに注目したい。筆者など両眼満足にそろっていながら、たとえば大徳寺名宝展など、2日も3日も通いつめるだけの熱心さがあるだろうか。

第9信 松江発 1891年5月19日

大津事件。

西田日記5月12日付の記事に「魯国太子過日長崎ニ御来着、諸所御遊覧ノ上御上京ノ都合ニテ大

		山陰新聞・新古美術品展覧会出品目録略				
		日付	作家	種別	作品名	出品者
1	A superb old dragon by Dasoku, otherwise known as Cho-ku-an 〔蛇足(またの名を直巻)筆の見事な古龍の図〕	4/28	二直菴	掛物	中龍左右人物	田部 長右衛門
2	a delicious scene by Okyo (belonging to Mr.Sato of Matsue) ... wild ducks in the water at the edge of a lake 〔応挙筆になる一雙の典雅なる屏風(これは松江市の佐藤氏所蔵の品)湖水のほとりに浮かぶ鴨の図。〕	4/21	応 挙	屏風	薄狗蘆鴨一雙	佐 藤 喜八郎
3	A Bugaku dancer. ... The picture belongs to a Mr. Tsunematsu, of Matsue; but I could not find the name of the artist. 〔「舞楽人物」…松江の恒松某氏の所有。作者不詳〕	5/ 2	不 詳	掛物	古画 舞楽人物	恒 松 隆 慶
4	One immense screen, representing the Chinese Emperor Genso-kōtei and his favourite Yōkichi, walking in their palace gardens, was very fine. 〔玄宗皇帝と楊貴妃とが宮殿の庭を散歩しているところを描いた大屏風は見事だった〕	4/21	永 徳	屏風	玄宗貴妃図	松 平 伯
5	... a screen 170 years old, by Domo no Matahei, representing ancient life in Tokyo, was worthy of its position 〔吃又平の筆になる170年前の屏風で江戸の風俗を描いたものは所を得て異彩を放っていた。〕	4/30	岩佐又平	屏風		古 志 伴 蔵
6	...a pair of fine old screens by Chōko Ichō—one covered with horse-subjects, another with cattle subjects 〔…朝湖一蝶画の二曲一雙の屏風—一面には馬もう一面には牛を主題にしたさまざまな絵がびっしりと描きこまれていた。〕	4/28	朝 湖 斎	屏風	牛 馬 図	小豆沢 金一郎
7	a byōbu belonging to a rich citizen of Matsue, named Okazaki. ...painted by famous Sotan. A group of Arhats (Rakam) ... 〔岡崎という富裕な市民所有の屏風…宗丹筆…一群の羅漢…〕	4/21	宗 丹	屏風	羅 漢	岡 崎 運 兵 衛
8	...a study by Sosen. The corner of a temple-court, perhaps, on a snowy morning; and three stone toros, in which monkeys are trying to shelter themselves from the cold 〔…耐仙筆。寺院の一隅を描いたものでおそらく雪の朝だろう。三基の石燈籠があり、その中で猿が寒気を避けようとしている図〕	4/21	祖 仙	掛物	猿 柳猿二幅	千 冢 宮 司 青 戸 建 行
9	Apes trying to catch the reflection of the moon in water. By Tan-yu. 〔水中の月影を取ろうとしている「猿候図」。探幽筆〕	5/ 1	探 幽	掛物	猿 猴 図	佐 藤 喜 八 郎
10	A sansui study by Sotan...: mountains and water in winter 〔宗丹筆の山水…これには冬の山水の様子が描かれている。〕	4/28	宗 丹	掛物	画 二 幅	北 島 男
11	A wagtail and pink lotus. By Buncho. 〔鶺鴒と桃色の蓮。文晁〕	5/ 1	文 晁	掛物	蓮 鶺鴒 鴿	内 藤 文 蔵
12	Banana-tree and frog. By Bai Gai. Belonging to Judge Nakada Takewo, of Matsue.. 〔芭蕉と蛙。梅崖筆。松江中田武雄判事所有〕	4/23	梅 崖	掛物	芭 蕉 蟾 蜍	中 田 武 雄
13	Two carp studies by Genki. 〔源琦筆鯉二幅〕	5/ 3	源 琦	掛物	中瀑布左右鯉三幅	錦 織 正 太 郎
14	A lotos and a wagtail, —by Bokushin 〔蓮と鶺鴒, 牧心筆〕(清水寺出品)	見当らず, 狩野牧心・齊安信, 清水寺に現存。				
15	A superb white-lotos study, by Sessu. 〔素晴らしい白蓮の図, 雪舟〕(清水寺出品)	4/21	雲谷等与筆 と誤ったか	見当らず「中観音左右連鶺鴒三幅」あり等楊		
16	Anonymous Kakemono: A priest teaching the Sutra to acolytes. 〔作者不明の掛物がある。僧が弟子に経を説く図。〕(清水寺出品)	見当らず「釈迦初転法輪」が清水寺に現存。このことであろうか。ハーンは釈迦を僧と見たのであろうか?				
17	A triplet of Kakemonos by Yusei, ... "Three Cities." 〔友声筆「三都ノ図」三幅〕	5/ 6	友 声	掛物	三都ノ図三幅	樋 野 徳 右 衛 門
18	a picture of swallows painted by the chief of the forty-seven ronin, 〔四十七士の首領の燕の図〕	4/21	大石良雄	掛物	自 画 讚	桑 原 羊 次 郎

津御巡覽中、昨日同処巡査ノタメ左額ヲ切りツケラレ負傷シ玉ヒ…」がある。

ここでハーンは天皇が憂慮してられるという理由で普段は陽気な松江市民も深い悲しみに沈み、中学生らも英作文に一番兇悪なるものとして津田三蔵の名を上げたと短くまとめている。この大津事件のあと京都で起った畠山勇子の自殺事件は、作品「勇士」「京都紀行」にとり上げられることは衆知のとうりである。

第10信 松江発 1891年 5月29日

第7信でも報じられた籠手田知事の離松の様子が1パラグラフあり、次に民謡「大黒舞」採集記事が続く。この部分はそのまそっくり「心」の巻末付録「三つの俗謡」の序論として再録されている。それによるとこの5月29日付の通信は6月13日にジャパン・メール紙に掲載されたことが分かる。発信日から約2週間後である。またこの「三つの俗謡」は明治27（1894）年10月17日アジヤ協会で発表された。

大黒舞は「俊徳丸」「小栗判官」「八百屋お七」の三篇であるが、西田の努力にもかかわらず、入手した歌詞を英訳したものは散文で、ハーンが感動したものと民謡の素朴な魅力は全くそこなわれてしまったと見てよいであろう。読みごたえのあるのは序論の部分、つまりこの通信の民謡取材記録である。ハーンらしい弱者に対する深い同情心が読みとれるヒューマンなタッチの名文である。

第11信 松江発 1891年 6月23日

お化け博士の異名を持つ井上円了氏の松江訪問記。

山陰新聞 5月17日付の記事に、

「井上文学士とヘルン氏

ヘルン氏は円了井上文学士が来松せんとのことを聞き、^{べんおじやくやく}抃舞雀躍して其期遅しと待ち居れるよし。井は印度哲学の事につき同文学士に就き質疑する所あり、以て其識量の一部を盛んならしめんとの意に在りと。斯文熱心なる感ずるに足る。」とある。

ハーンは来日前もマックス・ミュラーの本などで仏教学に傾倒しており、来日後はじめて仏教学の若き学徒に会って、いろいろ教えるこの機会を心待ちにしていたものと思われる。この通信文では井上円了の東洋哲学専門の大学設立の企画に大賛成を表明し、東洋哲学は是非日本人の手でと、われわれ日本人も赤面するほどの国粋ぶりを発揮している。特に井上円了の訪米記の演説を引いて、日本人は自国の文化・芸術にもっと誇りを持つような教育を行わなければならないとハ

ーンらしい西洋ぎらい、日本びいきの面目が躍如として伝わる好篇である。

この通信文が直接的にどの作品の題材になったかは言えないが、たとえば *JAPAN An Attempt at Interpretation* のような作品のバック・ボーンとなっていることは確かである。お化け博士はまたハーンの怪談研究への刺戟を与えたとも言われている。一人の若い仏教学者に一通信全部捧げるとは大した熱の入れようである。

第12信 松江発 1891年7月17日

玉造温泉とカール・フローレンツ博士。

本通信のメインになっている玉造温泉紀行は筆者の知る限りではハーンの他の作品には登場しない。したがって次信の稲佐海水浴場見聞記と共に読み物としてそれ自体独立した面白さを有している。発信日は7月17日となっているが、実際訪れたのは7月15日（水）、16日（木）の両日であったようだ。この日付は本文中に言及のある玉作湯神社の夏祭りの日から考証した。西田日記によると16日（木）は「ヘルン氏ヲ訪ヒ、フロレンツ氏ト伴ヒ天主閣ニ登リ、市中散歩、望湖楼ニ同氏ノ饗ヲ受ク。」となっており、ハーンは旅行中で在宅していない筈だが、玉造は松江からわずか2里半（10キロメートル）、俵で1時間半とあるから、16日早朝玉造を発ち、途中湯町の宝石工場を見学しても、午前中か午後早くには松江に帰着できる筈である。だから午後西田が訪問してもハーンは在宅していることは十分可能である。玉造から帰って早々に今度はフローレンツ博士との付き合い。ハーンも忙しい人である。松江のハーン研究者池野氏も「松江の小泉八雲」で玉造訪問を15、16日と考証している。

この通信でハーンは玉造の神社を金刀比羅宮と書いている。ガイド・ブックでも玉造の神社は玉作湯神社となっているので不審に思い、同神社に問い合せてみた。折りかえし遠藤融宮司から丁寧な返書が届き一切の疑問が氷解した。ハーンの誤解は神社脇に小宮（高さ1.5m、奥行、幅各々0.5m）が祀られ金刀比羅神社と記した社号額がかかっているのを見たためであった。また玉作湯神社の夏の大祭は古来より今日に至るも毎年7月15日とのこと。これから前述のとうり旅行日が考証できたのである。

更にハーン一行が本殿昇殿を許され、いろいろ見せてもらった社宝のうち、信長の署名入りの書状があるが、これは天正5年12月5日当時の宮司の祖先遠藤左京之進が現兵庫県佐用町の戦における戦功による感状で、それをハーンが見せてもらったようである。遠藤宮司も玉作湯神社がハーンゆかりの地であることをはじめて知られ喜んでおられたが、筆者の突然不躰な手紙がこんな結果を産み喜ばしく思った次第である。

玉造から帰ると、前に言ったとうりカール・フローレンツ博士が待っていた。女子師範の卒業生が博士に手芸作品をプレゼントしたのに対し博士も返礼に教育書を贈ったことが書いてある。返礼

用の書籍を都合するため西田が一役買ったことはその7月13日付の日記に見える。即ち、

「フロレンツ氏、女子師範卒業生ニ書籍ヲ贈与シ度トノ事ニ付協議ヲ受ケ、書籍商ヲ伴ヒ夜同氏ヲ訪ヒ云々」

第13信 杵築発 1891年8月3日

稲佐海水浴場。

ハーンは「杵築」「杵築雑記」で杵築、特に大社の事に多くの紙筆を費しているが、稲佐、とりわけ海水浴場としての稲佐については余りふれていない。本通信のうち作品に再現されているのは、「杵築」（XVII）における稲佐浜の描写と国譲りの談判の故事のみである。

日本旅館の茶代の風習を解説するところが面白い。たとえば、

「ところが習慣が分からないのか、余り払いたくないのかの理由で日本人より茶代を出し惜しみする外人はあとでがっほりふんだくられる羽目になる。自分の楽しみのため日本中を旅行してまわられる外人は普通以上の資力があると考えられるのは当然で、したがって払う能力がありながら茶代を出ししぶるという態度は、あとでうんと払わせてやれという立派な口実となるらしい。外人旅行者自身のためには、旅行する土地、その習慣を熟知し、喜んでそれに従う方が、日本の宿屋の亭主に外国流の経営法をしると強要するよりはずっといいだろう。」といった個所はいかにもハーンらしいところである。

またわれわれは稲佐流株式方式の海水浴場経営法を教えてもらうことになる。現代風に言えば会員方式の海水浴場と言うべきか。資料的には当時の山陰新聞の記事がある。これは8月9日付のもので、ヘルン氏の杵築での動静を報じたものである。よくもまあ一外人教師の行動をこれほどまでにくわしく取材したものだとあきれるが、その最後の方に次のような個所がある。

「・・・氏は海水浴を評して曰く。海底の細砂にして危険無きこと、浜辺の広濶にして運動場に差支無きこと、加ふるに風光の佳勝、空気の清爽なること杯、恐らくは本牧、大磯の及ぶ所にあらず、実に絶妙なりと。此の感歎は遂に氏をして該浴場維持の為に設置せる保寿会の会員たるに至らしめしが、該会はモト2000株募集の筈なるに、早く既に1000株には満ちたりといへり。」

本文によると1株50銭であるから、目標の2000株は1000円である。ハーンの月給の10倍だから誠にささやかな株式会社である。保寿会の名の起りは恐らく現在も稲佐浜に立っている養神保寿の記念碑（明治36年9月建立）と関係があると思われる。梶谷泰之教授から送られた写真によると、本文にも出てくる海水浴場創設に功劳のあった二人の医師の名前も見える。ハーンの滞在した因幡屋の稲佐別館は養神館といい、別に保寿館というのもあったそうである。

第14信 熊本発 1891年11月30日

発信地は熊本になっているが、内容的には松江時代の残りや新任地熊本への道中記が半々になっている。また末尾に若干の熊本第一印象が語られる。

松江からの報告には2つの災害が報じられる。一つは10月28日の尾濃震災であり、もう一つはコレラ禍である。ハーンという人はどうも画期的な大事件にうまく巡り合わせる人だ。被害を受けた人々には気毒な言い方だが・・・ハーンが体験したのは愛知、岐阜両県を襲った未曾有の大地震であった。その猛威は震源地から遠くはなれた出雲でも強震部と微弱震部との境目であったことでも分かる。この地震については新聞や各県の報告書に基づいて編集したと言われる「風俗画報」(35, 36号)がくわしい。

師範学校生徒を直撃したコレラ禍については、熊本赴任後西田千太郎との文通により詳報を得、死の床にあっても起き上って校長に敬礼しようとした或る生徒の逸話は作品にも再録されている。「さようなら」(IV)

11月15日(日)朝、ハーンは大勢の知人、生徒らの見送りを受け、汽船で松江を去り、宍道から俣を連らねて中国山地横断の赴任の旅路に出発した。ルートは現在の道路地図ではうかがい知れないが、大体斐伊川上流、三刀屋川沿いの道、今の国道54号線をたどって南下したのであろうか。この国道線上にハーンが一夜を過した布野という所がある。三次から今度は375号線に沿って呉に出たのであろう。呉まで車行3泊4日の旅。呉から門司までは汽船で船中一泊している。門司からはその年の7月に熊本まで開通した九州鉄道で11時間もかけている。熊本へは19日夕刻の到着であった。

道中ハーンらしい愉快的な観察記録が読めて楽しいものである。特に門司から熊本へ向う車中で見た日本人紳士の服装についての観察は Isabella L. Bird の *Unbeaten Tracks in Japan* を引いて興味深い。

熊本の第一印象はハーンにとってあまりパツとしないものであった。しかしそれも市の大半が西南戦争で焼け、まだ戦禍から十分に立ち直っていないからだという正当づけも忘れない。

第15信 熊本発 1891年12月7日

熊本には古風な日本を愛するハーンの目を引くものは何もないようだが、この通信では新しい日本の象徴とも言うべき軍隊、即ち熊本城とそ周辺を占める第六師団の紹介をしている。大平洋戦争時だったら敵国の英国人に軍の施設などとても見学させなかったであろう。日本軍人の教育法に感心し、体格の点でも欧米の兵とけっしてひけをとらないなどと相変らずの日本びいきは依然として盛んである。

次は熊本のめばしい名所、加藤社と本妙寺の紹介である。熊本に於ける清正公の人気を認識し、神式、仏式両方で同公を祀る所を取り上げたのは、清正がスペインのキリシタンをやっつけたことがキリスト教嫌いのハーンに訴えたこともあろうが、新しい任地での自分の立場も考えてのこともあるだろう。ハーンの訪ねた加藤社は以前熊本城内にあったものが、鎮台がおかれたため一時城外

北の新堀町（現京町）に鎮座された時のものである。本妙寺（ハーンは錦山^{にしきざん}と書いている）の描写のうち、灯籠や唐獅子のびっしりと並ぶ参道、参道の右側に軒を連らねる日蓮宗の寺々などは昭和の今となっても変わらない。ただ線香やローソク、土産物売る店も殆んど見当らず、何だかひっそりしている点が昔日と異なるようだ。ハーンも例の‘胸つきガンギ’のある御殿坂を登り、巡礼のゴールたる浄池廟へ進んだのであろう。

ハーンが「ウインチェスター銃の薬莖ぐらいのお宮に納めた加藤清正公の像」と表現したお守りは本妙寺でも、再び城内に移った加藤神社でも売っていなかった。加藤神社の湯田栄弘宮司に伺うと、以前そのようなものを一個発見して、複製に出したのだが、そのまま行方不明になってしまったとのことで、とても残念であった。

第16信 熊本発 1892年2月5日

「12月28日当地で举行された年一回の観兵式以来さして重要なことは起らなかった。」で始まる本通信は2月2日に起った大火の短通信である。熊本県立図書館で調べてもらったところ、暮も押しつまった頃に軍の行事などなく、恐らく1月8日の間違いでなかろうかとのことであった。1月8日の観兵式なら、そのあとハーンは野崎師団長の祝宴に偕行社に招かれ、その時フロックコートならぬ紋服姿で皆をアッと言わせた逸話も残っているのだからハーンの記事には新しい筈だが奇妙なことである。

さて大火のことだが、出火地点は Takajomachi 近くの Furogoten で折から建築中の兵舎だったとある。鷹匠町は古い地図で考証できたが Furogoten が分からない。一応不老御殿と当ててみたが自信がなく、熊本市に問い合わせしてみた。元熊本市文化課長の鈴木喬氏から返事があり、古御殿のことであろうとのご教示を得た。

後に熊本県立図書館から送っていただいた当時の九州日日新聞（明治25年2月4日）のコピーから次のような情報を得た、即ち「師団内の出火」という見出しで、

「市内下馬橋南第六師団歩兵第廿三連隊域内に於いて歩兵第三大隊を増置するに就き之が為昨年来兵営建築中の処最早既に竣成を告げ受負人より近日内に師団へ受渡しをなす手筈なりしに一昨夜11時毒火炎々天を焦すの光景にして一時は人々^{きよう}競々9年の役を再演するかと疑懼したりしが、漸く翌午前二時頃鎮火することを得たり。右営は未だ請渡しの済まざるものなれば無論軍隊の兵器等を消失するなかりしは不幸中の幸と言うべきか。乎鳴450余坪の壮屋一炬転瞬の間に灰燼と化す。祝融^{しゆくゆう}氏の戯^{たわむれ}れも亦^{また}甚しいかな。」という記事と

「右師団内の出火は一昨夜直に我紙上に掲載せしに陸軍曹長某氏来社ありて右の家屋は師団より未だ受取らざるものなれば師団の兵営に非ざるを以て事実を誤らざる様記載し呉よとの通知ありしにより記事^{さしつかえ}差支^{かど}の廉文を改むるも面倒なれば已むを得ず全文を徹却したり。尤も既に数百印刷の後なれ先刷の数百葉には右師団兵営の焼失と記載したるもありしを以て一言^{こと}茲に及ぶ。」という広告

である。

ハーンの記事によると、4万円に及ぶ工事費は、2月25日建物引き渡しの時点で受請人に支払われることになっていたのに、損害額は全部工事受請人がかぶることになったとあるが、そのあたりの事情はこの広告文でもおよそ見当がつく。さりげない書き方ながら、ハーンの人柄がしのばれる所である。

ハーンの記事と比較すると、出火時刻夜11時は完全に一致、鎮火時刻も「午前2時頃」「午前3時まで」とこれもほぼ一致。ハーンの記事は元新聞記者らしく常に正確である。

第17信 博多発 1892年4月3日

余りいい印象を持たなかった熊本であるが、熊本の風土よりは、熊本の県民性のいい所を見ようと努めていることが分かる。それは熊本県民の質実剛健の気風である。次の文などはハーンのより公平なより客観的な見方への努力がうかがえるであろう。

「はじめのうちは私も出雲流の考えが正しく、熊本流の考えが間違っていると思っていた。日本では外観で物を判断するといつも裏をかかれる。(下点一筆者)」これらの観察は作品「九州学生とともに」に生かされることになる。

次は「熊本で六ヶ月生活したあとでは、こんどの博多旅行は愉快的気分転換になった。」と言っている春休みの博多旅行記である。博多は余程ハーンのお気に召したらしい。博多では石田屋旅館に泊り、筥崎八幡宮、櫛田神社、万行寺などを訪れている。ここでは作品「博多にて」にも出てくる博多大仏についての考証を書いておく。考証に当っては福岡市役所の友成常夫氏のお世話になった。

本文では Kamidoyemachi となっている所在地の和名がまず問題であった。作品「博多にて」では the Street-of-Prayer-to-the-Gods と英訳(?)され、これまで諸家は「念仏小路」とか「祈願小路」とか訳していた。しかしこれは友成氏の調査で上土居町であることが判明した。現在は残っていない町名である。ハーンが見た頭部だけの大仏について、友成氏が送って下さった資料のうち「福岡歴史散歩」にあった三宅酒壺洞の博多大仏から引用し略述しておく。

明治23年頃、博多の浄土門徒衆が神戸の能福寺にあった大仏様の首をもらい受け、博多に運んだ。これに肢体を鋳継いで完全な大仏様を造ることを発願して、上土居町の鋳物師磯野七平の家の一部を仕切って安置したのである。門徒衆は資金集めに奔走したが、思うように資金が集まらず、これを見た称名寺の住職知眼和尚は一切の事業を引き受けて大仏講を組織し、一般家庭から青銅製の鏡や鋳造用の浄財の寄付を呼びかけた。ハーンが見たのは、恐らく和尚の呼びかけで鏡が集まりだした頃、まだ磯野家に安置してあった頭部だけの大仏様であろう。

なお完成したのは明治42年のことで、博多片土居町称名寺に安置された。大正8年称名寺が東区馬出大仏通りに移転した際、大仏も移されたが、昭和19年7月7日大平洋戦争のため軍の命令で供

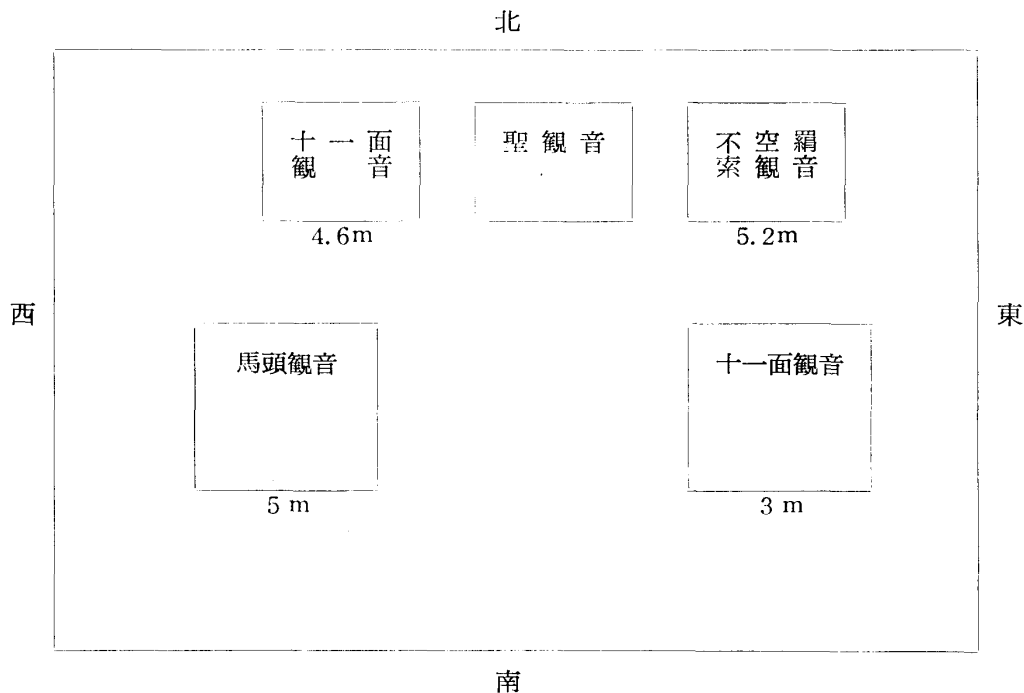
出され姿を消した。

大仏様は座像で高さ約6メートル、蓮台の高さ約2メートル、石台の高さ約3.3メートルあったと言われるから、合計すると約12メートルになり、ハーンの数字36フィートとほぼ一致する。

博多市内見物のあとハーンは太宰府に立ち寄る。天満宮は折からの大祭で(4月4日の厄除祈願大祭でなかろうか——味酒宮司談)境内は大にぎわいであった。ここでハーンは太鼓橋を渡り、現存する青銅製の麒麟やウソを見ている。帰途ニヶ所珍しい所を訪れている。一つは観世音寺、もう一つは都府楼跡である。

観世音寺では当時講堂にあった巨大な仏像群を見ている。次は石田琳円住職が書いて下さった往時の配置図である。ハーンが「悪夢の如きすぎましい形相の仏像」と評したのは馬頭観世音像であったことが分かる。

都府楼跡では巨石群を見ている。「全部で250個の巨石があるとか、あったとか言われるが、た



しかそんなに多くは見えなかった。」とハーンは書いているが、ハーンの言う250という数字は近くの蔵司跡の礎石も入れての数であろう。都府楼跡だけでは77個だそうだ。

ハーンは「ここは日本史、日本文学の専門家が訪れてみる価値があると思う。もしまだそのような学者が訪れていないとしたらだが・・・」と本通信を結んでいるが、本格的な発掘調査が始まったのは昭和43年以降のことだというから、約80年後のことである。

第18信 熊本発 1892年5月7日

5月6日、7日両日、練兵場で行われた大招魂祭の報告と、日本軍人に関する一般的な考察からなる。

大招魂祭については熊本県立図書館から送られた往時の九州日日新聞の記事（5月4日、5日、8日、7日）からくわしい資料が得られた。大招魂祭奉納の競馬に関しハーンは6日に50レース、7日には70を下らぬレースがあったと書いているが、九州日日新聞の記事では6日は52回、7日は53回と報じている。ハーンが特筆している Keiba 君なる少年花形騎手のニュースだけは発見できなかった。

このあと日本軍人に関する好意的観察に移るのであるが、ハーンは日本軍人の公私の変身の見事さ、即ち軍務にあってはいかに厳しい将校も家庭にあってはいかにやさしい夫でありパパであるかを述べ、また日本兵の教練について、スポーツ好きのハーンらしい観察がある。

第19信 熊本発 1893年2月4日

嘉納治五郎校長の離任についての報告。

2月4日の日付が正しいとすれば、嘉納氏の実際の出発は「明日早朝」とあるから2月5日ということになる。これより先九州日日新聞（1月27日付）は

第五高等中学校長更迭（26日午前11時東京発）

第五高等中学校長嘉納治五郎氏は文部省参事官に転出し第四高等中学校（金沢）長中川元氏第五高等中学校長に任せられたり

という電報を掲載している。本通信では嘉納校長の人物、特に柔術の達人としての令名を讃える文章に終始する。

なお嘉納校長は第五高等中学校長として熊本に着任した時も文部省参事官であり、前記鈴木喬氏の調査では文部省転出時の正式の職名は「文部省参事官兼大臣官房図書（検定）課長」ということである。

主要参考文献

- | | | |
|----------|--|------------------------|
| L. Hearn | <i>Letters from Shimane and Kyūshū</i> | The Sunward Press (昭9) |
| 丸山 学 | 丸山学選集 文学篇 | 古川書房 |
| 池野 誠 | 松江の小泉八雲 | 山陰中央新報社 |
| | 西田千太郎日記 | 島根郷土資料刊行会 |

「島根・九州だより」(小泉八雲) 解題

広瀬 朝光	ラフカヂオ・ヘルン 研究資料(1)	「山陰新聞」の記事をめぐって 島根大学山陰文化研究紀要 第15号
速水 保孝	出雲祭事記	講談社
田中 政喜	筑紫路大宰府	青雲書房
内田兼四郎	松江大橋物語	
江崎 俊平	名城伝説	教養文庫
	風俗画報 (35, 36号)	東陽堂
湯田 栄弘	仰清正公	加藤神社

(昭和60年8月16日 提出)